

---

# 物体 A の職務

あおかな

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

物体Aの職務

### 【Nコード】

N5538S

### 【作者名】

あおかな

### 【あらすじ】

ある日の休日に母親に命令された主人公 脩一は蔵掃除に向かう。そこで出会ったのは物体Aだった。物体Aの奴隷（たぶん部下）になった主人公脩一は物体Aから頼まれる頼み事を解決していく

いち：なんかいました。

いち

まさかこんな所に、真昼にこんな奴がいるとは誰が思っただろうか。

観測記録至上最高温度を観測するのではないかと思うほどの気温が十一時前というのに高かった。脩一は暑さで鈍くなっている身体を起こして、窓越しに外を眺めれば暑さで空気がブレて見える。

げえっと思いつながら俺はお昼のニュースで流れるだろう光景を脳裏に浮かべた後、考えるのを止めた。そして、顧問の都合に大いに感謝した。

脩一はテレビをBGMがわりに週刊少年漫画雑誌を読んでいた。

ゴールデンウィーク中なので、合併号の週刊少年漫画雑誌。速く続きが読みたいと思いつつ、普段読んでいないマンガでも読むかとページを捲った。

そして、ドアノブが回ったのを確認して、漫画雑誌から教科書に持ち替えた。ノック無しに開けられたドアから母が入ってくる。母は持っている教科書と傍に置いてある漫画雑誌を一瞥した後、盛大な呆れ混じりの溜息を吐いた。

「……マンガを読むのも良いけど、バレバレの行動はしない方がいいんじゃないの？」

「あはは」

「あんだ、ヒマよね？ どうせ家にいたって、ゴロゴロゴロゴロと寄生虫とかダンゴムシみたいに転がって、ただ飲み食い寝て過ごし

ているなら体力も有り余っているよね？」

最初は何事かと思った。部屋のドアにいる母親は今から田んぼへ行くのか、もんぺを穿きポケットからはゴム手袋を忍ばせている。

頭には麦わら帽子、首には日焼け防止を兼ねた手拭いが巻かれていた。日焼けはしないし、汗は拭えるわ、手を拭けるわで重宝している農作業をするためには必須アイテムである。

今はそんなことはどうでもいいのだ。

脩一は母から目を逸らして、身体を起こして体育座りでテレビに意識を集中しようとした。

「寄生虫とかダンゴムシも起きたばっかで動くのはつらいんだ。今だって寒かったら、すぐにねぐらに帰って冬眠したいくらいだ……」

「ヒマなんだよね」

いつの間にか、テレビの前に立って主電源を消す。主電源どころか、テレビ線とコンセントの両方を引き抜くと母はぽいっと後ろに投げ捨てた。

同時に母の言うことを避けられないことを悟る。次に起こる出来事はすぐに予想がついた。脳内でシュミレーションがなされ、脩一は顔色を蒼褪めた。

「ヒマです、ヒマです！ ヒマすぎて、日向ぼっこでもしようかと考えていたところだけど、今すっごく手伝いたい気分です、はいっ！」

がつくんがつくん首が縦に動き、必死に肯定しようとした。ここまでしないといけないわけでもないが、今は静かに素直に従っていた方が自身のためだと思ったからだ。体育座りから正座に座り直して、母に向き直る。大量の冷汗がダラダラと背中だけでなく身

体中に流れ、脩一は背筋はピンと伸ばした。

「こんなに天気の良いのも。いつもは部活に使っている体力も大量に有り余っているのだから物置の掃除くらいへっちらよね？」  
「……へ？」

母は振り返ってガラリと部屋の窓を開け放ち、眼下に見える蔵もとい、物置を指差した。

ビシイと擬音がつくほどに指差した母は息子がハウスダスト持ちだということをよく分かっているはずなのに非常に過酷な指示を下したのだった。

脩一は聞き間違いだと信じたくて、もう一度その指示を聞きたくて惚けた。

「『へ？』だなんて間抜けな声出さないの！ もう一度言うから耳の穴かつぽじってよく聞きなさい。天気がいいから物置の掃除をしてきて。ちゃんと窓を全部開けて。見間違えるくらいにピッカピカになるまで」

「あーパーセントも雲がない、綺麗で爽やかな青空だなあ。どこかの海を映しているんだろうなあ……」

正座して、母の後ろに見える窓から空を見て言う。

「ご飯抜きにされなくなったら、さっさと行って来い。田んぼの手伝いと掃除どっちがいい？」

「……………掃除させていただきます」

田んぼの手伝いとは酷だ。超重度のアレルギーだったら、迷わずに田んぼの手伝いに向かうのだが、家から近くて掃除しなくても分からない物置に行けばいいと思ったからだ。体力は有り余っている

のだが、掃除の方がはるかに楽だろう。

脩一は楽な方を選んだのだ。

ドサリと掃除用具を床に置き、俺はポケットの中に入れていた防塵マスクを取り出して口元、鼻を押さえて耳にかけた。普通の綿製マスクではとても防げないほどの埃と塵が部屋で舞っている。

肉眼で確認できるほどに舞っているのだから、ハウスダスト中でもダニ、埃、ゴキブリのフンに過剰に反応する脩一の鼻は耐えてくれないだろう。

この防塵マスクはアレルギー性鼻炎の俺にとって、掃除の時は欠かすことのできない必須アイテムだ。ハウスダストと杉花粉という最強のアレルギーコンボを持ち合わせている少年にとってゴールデンウィークは最大の敵。家に籠もって花粉やら埃やらが大量に舞っている外へ出ずに空気清浄機で洗練された良い空気の中で、ダラダラ過ごすのが例年通りになるはずだったのだが、今年は様子が違った。

そんなハウスダスト持ちの脩一に対して、この物置の掃除をしろというのは非常に過酷なものだが、指示してきたのが母なので逆らうことはしないのが賢明な判断だ。

季節は杉花粉が猛威を振るうのを止め、代わりに俺が登場してやったからには喜べと患者数が増えている檜花粉が飛びに飛んでいるゴールデンウィーク。ゴールデンウィークは部の顧問が旅行に行くからという理由の下、中止となった。その行先が花粉のない北へ行ったのだから顧問もまた花粉症で悩んでいる口なのだろう。全くもって同情なんてしていないが。

母の命令に逆らえない、逆らわない脩一は完全防備の中で物置にやってきたのだった。こ汚いを通り越して、どこまで掃除しなかったらここまで汚なくなれるのか不思議に思えてくるくらいに汚かった。

どうせ物置の住人がいなくなってから掃除という掃除はしていないのだろう。雛壇やら五月人形、黴の生えた鯉のぼりが置いてある

辺り、我が母親のズボラさを認識せざるを得ない。

そういえば最近、雛壇やら五月人形が飾られなくなったなと思った。五月人形とか鯉のぼりとか今の季節に合ったもののなに。雛壇は飾らなくても、妹や姉が嫁に行けなくてもいいのかと余計な心配をしてしまう。その前に捨てるものは捨てればいい。

脩一はとにかく窓を開けることにした。物置と言っても一軒家を土足にし、家に納まりきれない物々を押し込んでいったら、いつの間にか物置と化していた。とても言い訳してくるのだろう。

一軒家に住んでいたひい祖母が知ったらどう思うのだろうかとか脩一は思った。かなりの潔癖症だったと聞いているからだ。その曾祖母が祟って出てきたらどうするのだ。

ユーレイや科学の力で立証できていないものについて脩一は一切信じない主義である。なので、非科学的な何かが出てきても知らないフリをして、受け流すつもりだ。

みしりみしりと老朽化した物置内を進み、窓の枠に手をかける。ぐつと窓を開けようとするのだが、固くて開かない。そういえば建物自体が歪んでいて傾いており、窓が開かないと我が母親が言っていたような気がしてきた。

「開かんかい、このやろう!!」

指に力を精一杯入れて窓を開けようとする。建物が左に傾いているから開かないのは当然なのだが、ここまで開かないと意地でも開けたくなくなる。元来の負けず嫌いが発動した。こんな窓一つに負けず嫌いを発動しないで、別のことに使えと言われようが今はこの窓を開けたかったのだ。

「その窓、開かずの窓だから開かないわ」

「開かずの窓なんて建物を建てる時にできるわけないから絶対に開く! 窓が開かなくて窓は何の役目を全うするというのだ!!」

否定されて、くわつと顔を真一文字に歪ませて脩一は叫んだ。  
話が違ってきていなくもないが、そんなこといちいち気にしていられない。

もう一度、窓の棧に手をかけて開けようとしてみる。ギチギチ指が鳴って、窓より云々、自分自身の指が悲鳴を上げるんじゃないかと思えてくるほどだった。

「建てている時に歪んでしまっただけを気付かず完成まで持ち込み、入ってみていざ窓を開けようとしたら開かない……だなんて、あり得る話じゃないか。今みたく平行か調べる測定器なんてない時代だったんだ。適当に誤魔化したってそんな気にするような時代ではない。一応、ビー玉転がしても分からない傾きなんだぞ」

「……………ところで、お前誰だ？」

ようやく訊ねる。

家の敷地内には脩一しかいないのは朝起きて、リビングに入った時に知っていた。この物置にも何か物を取りに来ない限り、誰も近づいていない。むしろ、近づくなと言われたぐらいだ。

だから今、脩一の目の前にいる少女というか幼女というか。年齢はおおよそ十二歳ぐらいの少女はいてはならない存在だ。

存在を否定したくはないが、この少女だけは否定したかった。

ぐりつとビー玉のように瞳は大きく、零れ落ちてしまいそうだった。するりと腰まで伸びた黒髪。おかっぱ頭だったら間違いなく、コケシやら市松人形だといじめられていただろう。

伸びた黒髪は金髪だったら、違う人形に姿を変えていたと思われるウェーブがかり、まず乾かすのに苦労するだろうとあらぬ心配をしてしまった。

「ん？　ようやく我が名を聞いてくれるか。我が名は……………」



「悪霊たいさーん！！ 名前なんて名乗るなああ！！ 俺を異世界に飛ばす気か！？ そうなんだろ、そうなんだな！？ この魑魅魍魎物体Aめ！！ さつさと正体を表せ！！ その前に俺、夢から覚めろ！！」

持っていた雑巾を少女 命名、魑魅魍魎物体Aに投げ付ける。

ボロ雑巾の中から更に厳選して選ばれた晴れある雑巾は物体Aを通過する。

顔に向かって投げたはずなのに雑巾は物体Aの顔面を通過し、ほとりと呆気ないほどに床に落ちた。

「名前を聞かんか。このボケが！！ せっかく恐れ高い我が名を名乗ってやろうとしてやったのに、貴様は聞こうともしないのか。貴様の耳はただの飾りなのか。私の綺麗で美しい声を聞くこともできないのか。飾りなら我に献上したまえ」

物体Aは何処からともなく、稲刈り鎌を取り出してきた。毎年使われているものだから刃こぼれなどしているはずもなく、ライトを当てたわけでもないのにキラリと光ってみせた。

「聞いてます、すみません。さつさと名乗ってくださいませ」

棒読みに言う顔と顔を顰めて、下から睨みつけてくる物体A。下から睨みつけてきても怖くない。むしろ可愛いと思うくらいだ。

「貴様、感謝しているのかしていないのか。聞きたいのか、聞きたくないのかはつきりせんか！ 優柔不断な男は昔からモテないと決まっているのだぞ！！」

「俺、一生二次元のキャラが嫁だから関係ありません。ゲームな世界大好きー二次元わっほーいい！！」

「一回滅ばされたいのか？ 貴様がそういう願望があるのなら問答無用で叶えようぞ」

「願ってもいません。叶えなくていいです。そのままお陀仏してください。俺のためにも閻魔大王サマの所にまっすぐ還ってください」

「何を！ 我は閻魔大王と並ぶ神ぞ！ 我もまた八百万の神々の一神なのだ！ 本来ならば敬れる立場にあるのだ！！ 貴様も態度を改めよ！！」

「じゃあ、敬う立場にあるのなら俺でも知っているカミサマの名前でも名乗り上げるのが妥当だろうが！！ この魍魎魍魎が！！」

「聞いて驚け、そして敬え。我はこの山を統べる神ぞ」

「……俺、耳が悪くなったらしいです」

脩一は何も聞かなかったことにして掃除に戻った。くしゃみを一発盛大にしてから、バケツに入った雑巾を取り出して窓拭きを始める。

ぎゅっぎゅつと雑巾と窓が擦れる音だけが響く。脩一はなるべく物体Aを見ないようにして、床を磨く。埃がマスクの隙間から入り、鼻がむずむずした。

不快極まりない。

「烟田脩一《かまたしゅうち》、我を見よ」

「ぐへっ！！ 何しやがんだ、この魍魎魍魎物体Aが！！」

「貴様が我のことを見ないからだろうが！！ 素直に見れば良かったものを……」

「俺は忙しいの！ この物置の掃除をしなきゃ我が家の大魔王に殺されるの！ 育ち盛りの少年にご飯抜きで十八時まで腹を持たせるのはきついものがあるんだぞ！？」

コンビニへ行くにしても車で往復三十分は掛かる距離に家はある。自転車だと片道二十分の距離。その行程をこなすためには家が所有

している田畑の前を過ぎなければならぬし、急な坂を下らなければいけなかった。

その坂の両脇を固めるのは杉並木。最大の敵を両脇に携えて通らないとコンビニへは行けない。ゴーグル、マスクをしたとしても家に着いた時、服についた花粉を落とす作業が俺を待っている。自分から危険な道は避けて通ってきたのが脩一だ。

今回もコンビニへ行こうとは全く思わなかった。

毎朝炊くご飯は大抵夕ご飯で食べ終わってしまうし、乾麺やカツブラーメンが家にあるかと言えば皆無だ。もしかしたら階段下の簡易物置にあるかもしれないが、脩一が勝手に入っていい場所ではない。キッチンを管理下に置いている母の許可がないと基本的に物置に入ることは出来ないのだ。

よって脩一がベッドの下に隠し持っているスナック菓子を食べて次の日の朝まで堪え凌ぐしか方法は残されていないのである。

食べたことがバレルイコールスナック菓子を隠し持っていることがバレルから脩一にとっては死活問題だが、何かしら食べないと眠れないのでバレルのを覚悟して食べる。次の日、涙を飲むのはもちろん脩一自身だ。

家の事情を知るわけがない物体Aはふんと鼻で嘲笑い、切って捨てる。始めから存在していなかったように扱ったのだ。

「我には関係ないことだ。貴様は我に土下座して泣き叫んで跪いていればいいのだ。そうだ、我は鳴き声が聞きたい、何か声真似しろ」「んじゃ、物置に住んでるネコの鳴き声を…ふにゃー!!」

「おお、やれば出来るではないか! もっとやるのだ! 我を楽しませよ!」

脩一がネコの鳴き真似をすると物体Aは無邪気に笑った。姿を現わしてからというものの、謙遜な態度を取っていた物体Aと違った姿を見れたことが嬉しくて、脩一はふと今朝父の行動を思い出した。

「え、次は……親父が毎朝ご飯をやってる甘えてくる雀のモノマネでも……ってちげえええええ!!」

「乗り気だったから見せてくれるのではなかったのか。良いノリッ  
ッコミだったぞ」

「俺、そんなに芸達者なつもりは一切ないんですけども」

「十分芸達者の部類に値するぞ！　我を楽しませるためにもっと芸を積むのだ！」

「そんな無茶な！」

「人間頑張れば出来ない声などないのだ！ 芸を積みめば誰だって奇怪な声を出すことだって出来なくもないわ！」

無茶ぶりを振ってくる物体Aに俺は尤もなツツコミを入れた。

「物体 A に言われたくねえええええええ！　大体、お前人間じゃないくせして俺にそんなこと言って良いのかよ！！」

「人間じゃないからこそ、言う権限があるのだ！ 我は人間以上の知能を持った優秀な神ぞ！」

「その人間以上の優秀な知能を持った神ならなんでこんな片田舎の家の物置に居るんだよ!? おかしいじゃないか!!」

「……よくぞ聞いてくれた。我は貴様の曾祖父が川から拾つてきた石に封印されていたのだ。敷地内を守護してくれると信じていたよ  
うだな。今はそうだな、ほれ。敷地内の柳の木近くに石祠がある。  
我は其処に祀られているのだ。石本体は田の傍に道祖神として大切  
にあるな。田しかないど真ん中に柳の太木があるのを知らんのか。  
貴様の通う学校の傍にあるだろう?」

ふふふと不気味に三日月に口元を歪めて嗤うと物体Aは流暢に語り始めた。脩一が聞きたいこととは大きく逸れてしまっているが、我が家が常軌を逸脱した家なのかと疑いを持った。

物体Aが言う家の敷地内にある石祠は大切に手入れされているし、  
脩一はその石祠に興味関心もなかったもので、幼い頃に扉を開けてし  
まったことがあるくらいだった。

「我が家つて一体」

「ただのしがない農家だろう？ 時計が身近になかった頃、人々は太陽の位置で時間を把握したりした。貴様の祖先も同じだったのだろう。石が拾われた時は大旱魃が遭つてな、川の水も枯れてしまったのだ。その時に祈る思いで川にあった石を持ち帰って崇めたのが始まりだと曾祖父は言っていたよ」

「じつちゃんに会ったことあるのか？！」

「実際にはないぞ。毎日農作業を終えてから私の元に通っていたのだ。本当に熱心なほどに我に語りかけておったわ。くだらないことから貴様が誕生したとか。青臭い話も聞いて我は余興を楽しんでいたものだ……」

感慨深いと言ったようにうんうんと頷きながら語る物体A。この家に来た理由が祖先によつて拾われてきた石に封印されていたという。

聞きなれないことだらけで脩一はパンクしそうになってしまったが、一つだけ引くかかることがあった。

「ん？ 物体A、お前封印されていたんだろ？ 封印されていたのに何で此处にいるんだ？」

「おお！ 忘れておったぞ！！ 貴様は我と波長が合うようだな。ふとした瞬間に幼かった貴様は私の石を触っていたようだ。その弾みで私の封印が解印されて今に至るといわけだ。物置にいたのは貴様の母も了承済みのことだぞ。ゴールドenウィークにも関わらず我が家の掃除をせぬから夜な夜な夢枕に立ったら貴様を超越したといわけだ」

「それって神様がすることじゃないと思うんだが」

「まあ、貴様が来たことで我の封印は完全に解けたということだ。感謝するぞ」

「感謝されても嬉しくも痒くもないんだけど。俺はどう反応すれば良いんですかね」

「だからその感謝のために我は貴様を下僕にすることを決めたぞ」  
「……………は？ 下僕、だと…？」

間抜けな声を上げてしまった。

「そうだぞ、光栄に思いたまえ。神が人間を下僕にしたのは平安時代前期に閻魔大王に仕えた小野篁以来の快挙ぞ」

「それって喜ぶべきなのか？」

昔の偉人の名前を言われても俺は反応に困った。小野篁の名前はもちろん脩一も知っていた。

脩一の家には昔の偉人大辞典ならぬ辞典があり、暇な時は読んでいた。小野小町の次に小野篁の名前が有ったなと思い出したのだ。だが閻魔大王は冥界の王。死者が六道への道を行くための裁きの番人として著名な神の名前だ。著名な神に仕えるのは誇っても良いだろう。

だが誇れと言っている傲慢な自称神だと言い張る物体Aは著名な神である保証は全くない。悪霊がコネを使って神に上り詰めたかもしれないし、人間を信じ込ませる口実で自身は神だと言っている新興宗教の教祖と同じだと脩一は物体Aのことを思っていた。物体Aが神だと全く思っていないのである。

それに脩一は神をもつと気品のあるものだと思っているので、こんな傲慢な自己中心的な態度を取っている物体Aが何と言おうと信じるつもりはなかった。

物体Aが脩一の前で神事を行い、実現したならば多少は信じるだ

ろうが、まだ悪霊程度の認識である。

自分の存在を気付かせるためだけに夢枕に立つなど悪霊のすることだし、注意を向けるなら別のことも可能だ。人間は幽霊や神の姿を直に見るのは叶わない。だからこそ夢やら金縛りなどの現象を起こし、たまに視野が向いている者を見付けて頼るのだ。

確かにお墓が汚くなっている時は妹や姉、母の枕元に曾祖父が立っては何かを訴えるような視線を寄越してくるのだと朝から会話しているのを聞いたことがあったし、実際にお墓に行ってみると故意に荒らされたと言っても過言じゃないくらいに雑然としていた。普段幽霊だとかUFOと言った超常現象に興味関心を示さない父や脩一も驚愕した。

父は信じていないと言っていたが、脩一には驚いているようにしか見えなかった。

それよりも。

「え？ 俺、下僕確定なの？」

「貴様の耳は節穴だったのか？ 耳穴の掃除をきちんとしているのか。北方系だと放置しておくとうるの聞こえが悪くなるぞ。貴様の祖父が良い例だ。半年耳穴掃除をサボったせいで耳の聞こえが悪くなっているではないか」

「耳穴掃除はちゃんとしてますって。お前は何様のつもりだよ。母さんみたいな口叩くな」

「何様かと神に向かって聞くのか。聞こえなかったのなら耳元で言おうぞ。我は八百万の神々の一神ぞ！」

「いてえー！！ 耳元でデカイ声で言うな！ 俺の鼓膜をぶち破るつもりか！？」

「破るつもりで言ったのだ。聴覚は視覚と同じで脊椎を通らず直接脳へシグナルを送っているからな。貴様のような空の脳みそに伝えるにはこれくらい大声で叫んだところで脳みその働きが誤作動を起こすことがあっても、壊れはしないだろう。……………たぶん」



「たぶんかよっ!!」

「おお、貴様はノリツツコミが良いな。将来は漫才師になるが良い。そして神有月に出雲へ向かって他の神共に芸を見せるのだ。さすれば我の評価も上がるうぞ」

「自分の評価のために俺を利用するな、迷惑千万だ。それに他の神共なんて言っていいのか？ 罰が当たっても俺は知らんぞ」

はあと溜息を深く吐いて拭き掃除を続ける。脩一の横に置かれて  
いる汚れたバケツの中に沈んでいる雑巾を摘まみ上げては落として、  
物体Aは遊んでいた。

脩一は横目に汚れた水が目に入ったら強烈に目が痛いんだぞと思  
ったところで、物体Aは物質を透過してしまうから関係ないのだと  
思い、掃除に専念する。

「何だ、心配してくれているのか。貴様に心配されるほど我は落ちぶれていないわ。貴様は忘却しようと必死のようだが、我もまた神なのだぞ。他の神の呼称など我の好きなように呼ぶぞ」

「いや、同じ神同士だったとしても敬う精神を捨てちゃいけないと思うんだけど」

「そんなの我の勝手であろう。貴様に指図される筋合いなどないわ」

ばしゃつと掬っていたバケツの水を掛けてくる。至近距離の中で脩一は避けることも叶わず、諸に顔面に水を被った。ぼたりぼたりと髪から滴る水に物体Aは腹を抱えて笑っていた。

「！ つつう……このつ何しやがんだ！！」

「我を無視して掃除なんぞするからであろう？」

悪気は一切ないと言わんばかりに胸を張って言う物体Aに溜息を吐いた。すうっと大きく息を吸うと脩一は怒鳴り付ける。相手が神だろうが地縛霊だとか怨霊の類だろうが関係なかった。

「ふざけんのもいい加減にしろっ！！ 聞いていれば、お前が掃除しろって祟らなければ俺は此処に来なかったのに！！ 掃除してくれることをありがたく思えやっ！」

「神に対して冒瀆する気か！」

だんつと足を踏み鳴らし、肩を掴むとガクガクと揺らす。ガククンガククン首が揺れ、視界もぶれて気分はコーヒークップに乗ったような吐き気が俺を襲う。

脳みそが溶けて、ぐちゃぐちゃに混ざり合っていくようだった。

胃を通過して、十二指腸で消化して小腸に差し掛かっているであろう朝ご飯の中身がごっそりと飛び出てきそうだ。

とりあえず脩一は部屋に置いてあるポテトチップスを食べなくて良かったと思うのだった。吐き気を堪えて物体Aの腕を掴むと無理やり手を離れさせると一定の距離を取った。

「っ！ だから、俺はお前を神だとは一切思っていないと何度言えば分かるんだっ！！ 神というなら証明の一つや二つあるだろうが！ ！ 託宣証明書だとか、他の神を引っ張ってくるとか、超常現象を起こしてみるとか！！」

「託宣証明など貴様の身分からして見れるものではないわ」

「だったら他のことをしやがれ」

「我に命令するでないわ」

ぴしゃりと脩一の言い分を跳ね退ける物体A。

「理不尽すぎる！ 俺に人権や主張権すらも与えてくれないというのか！？」

「始めから貴様に人権も主張権なぞ与えてないわ。それすらも気付かないほどに低能なのか？」

はんと嘲笑い、物体Aは小馬鹿にするように脩一を見下した。

「そりゃあ俺は下から数えた方が速いけどよ……て、何で存在が分からない奴に俺の成績の話をしなきゃいけないんだ。俺はまだ発達途中で脳みその細胞も活発に動いている！」

「ああ、もううるさい。口を噤め。貴様がそんなに超常現象が見たいと言っならば、貴様のために願いを一つだけ叶えてやろうではないか」

両耳を手で押さえて物体Aは頭を振った。ばさりばさりと日本人形のように長い漆黒の長い髪が左右に揺れ動く。

「……さっき人権を与えてなかったよね、この流れでいきなりそうなるのかな？」

「いきなりなどではないわ。我は貴様のために願いを叶えてやろうという気分になっただけだ。ただの気まぐれの一部にすぎんわ」

「いやいやいや十分にいきなりすぎるって！！ 下僕がどうなって願いを叶えてくれるまで昇格したのか俺には微塵も理解出来ないんですけど！！ それに気まぐれってアンタ本当に神様かよ！！？」

「我を疑うというのか！！？」

キツと睨みを効かせてくる物体A。脩一の中では既に物体Aは神様ではなく、悪さを持った地縛霊に絡まれてしまったのだと思っていた。そして信じたくなかったが霊と言った超常現象の類を見える原因となった物体Aを恨んだ。

「実体もないし、証明がなければ俺は信じないタイプなんだよ！

誰か神様だと証明出来る奴を連れてくれば、俺も認めてやるよ！！」

「貴様、下僕の癖して我を疑う気か！？ 貴様には信仰心というものが存在しないのか！？」

「存在したら跪くくらいになってるのが道理だと思わないのか！

？」

「………分かった。貴様を信じさせるには我を証明する者を連れてくれば良いのだな？ 此处で待っておれ。今連れて参るわ」

ぞんざいに威厳を放った声色で物体Aは言うつと忽然と姿を消した。

「消えたし。本当に消えたし。アイツ、本当に神様だったのかな……」

……」

脩一は母の命令を最大限尊重したいので、物体Aが再び現れる前に物置の掃除を済ませる。

始めからその場に居なかったモノがなかったのだ脩一とは自分に言い聞かせて、物置を後にした。

GWがあつという間に過ぎていった。

後半のGWは実に散々なものだった。花粉症持ちにも関わらず、物置掃除が片付いたと思つたら人手不足だという田植えに繰り出された。

母は脩一が花粉症で苦しんでいることを知らないんじゃないかと思つくらいだ。父もまた脩一より酷くはないが花粉症持ちでマスクをしないで、鼻水を垂らしながら田植えをしていた。聞くと暑いし、もうこんなの慣れた。とか言っていた。外にいれば身体が順応して、感覚が鈍くなるのだろうか。

脩一は感覚を鈍らしてまで花粉症と闘いたいとは思わなかった。

田植えで真つ黒に焼けた脩一は今度は日焼け痕と格闘することとなる。何でこんなにまで皮膚機能が残念までに機能していないんだと脩一は恨みなくなったが、恨むのもよくないと思い我慢した。

マスク焼けをしてしまった脩一は恥ずかしいがためにGW明けの初日からマスクを外せない。給食の時間はどうしようかと考えて、今から考えただけで憂鬱極まりなかった。

はぁあと盛大に溜息を吐くと前の席に座っている桑山健くわやまたけるが話し掛けてくる。

「なんか脩一、GW前よりも黒くなつてね？ 鼻の下とか赤くなつてるし」

「人が気にしていることを言うお前の感覚が信じられねえよ……」

げっそりとした顔で健を見ると、健はけらけらと笑った。

「ま、大方田植えでもしてたんだろ？ アレルギー持ちのオンパレードを持っている奴にとって田植えはきついよな」

「暢気に言ってるけど、俺と変われ。前半は物置の掃除をさせられていたんだが」

「すげえ鬼畜だな！俺だったら断固拒否して、逃亡するわ」

「逃亡したくても外は花粉が俺を待っている、田植えでは花粉と闘う、物置はハウスタストでくしゃみが止まらない。この苦しみが貴様に分かるかつ！！」

ぐつと健の肩を掴んでがしがし振る。

「分かりたくもないし、花粉症に罹りたいと思わないな」

「健、分かってないな…花粉症という人類最大の強敵はいつ発症するか分からない病気なんだぞ！貴様も気を抜いていれば…」

急に鼻がむずむずし、盛大なくしゃみを一発する。

暑いという理由でクラスメイトの一人が教室の窓を開けたようだ。学校の裏は杉林が広がっており、花粉症に罹っている者にとっては堪らない立地条件なのだ。

ガタリと立ち上がると脩一は窓を閉めに向かう。その間くしゃみが全く止まらない。くしゃみを連発し、目が充血している脩一を見て、慄いたクラスメイトは震えつつ開けた窓を閉めた。

「うー痒いっ！！」

出来ることなら目を取り出して丸ごと洗浄したいくらいだ。痒みに耐え切れずに脩一は常時持っている点眼薬を差して痒みが一時的でも収まるのを待つ。

「……死ぬかと思った……」

家では随時回っている強力空気洗浄機を学校にも持ってきたいく

らいだ。むしろ学校は全教室で空気洗浄機を配備してもいい。脩一並に花粉症を持っている奴だっているだろうし、そういった要望はどんどん出せばいいくらいだ。

冷暖房完備が第一優先になってしまうのは脩一も重々承知であるが。

「おおつす！ はよー！！ 朝から暑いのに窓締めきっちゃってどうしたんだよー」

豪快に教室の引き戸を開けて入ってくる少年が一人。自分の席に鞆を置くと窓を開けに窓際へ行く。これまた豪快に開けると青筋を上げたのは脩一だった。鍵に手を掛けて、開けようとする少年の肩を掴むと脩一はニツコリと目だけで哄笑した。

口元はマスクで覆われており、目は花粉症のせいで充血しており、傍目から見なくても近寄りたくない人間に指定されるだろう。少年はゆっくりと鍵を掛け直して、後ずさった。

「てめえ、花粉症被害がもっとも酷い俺の目の前で窓を開けるなんていい度胸だ。俺からのスプラッタ祭を受けたい強烈に残念な嗜好の持ち主だと思わなかったな……」

「え？ え…？」

「あいにく俺には和英辞書しかなかった。まさか辞書がこういう形で役に立つとは思わなかったな。覚悟おおおおおお！！」

「ぎゃー！！」

実はこの会話、GWが始まる前まで始業式からほぼ毎日繰り広げられるコントのようなもので、クラスメイトは知らん顔もしくは「またやってるよ」と苦笑いしつつ、誰も少年の擁護に回ることにはなかった。誰も火の粉を浴びることはしたくない。花粉症が苦しむこの時期は窓を開けずに、雨天の日を心待ちにしているのは、こ



のクラスだった。

「孝樹も懲りないよなーウマとシカが一緒になってる漢字の称号を持つていると胸を張れるのは孝樹だけだよなー！」

ケラケラと笑う健を脩一は睨んだ。

脩一にとっては毎日清浄な空気を求めているだけであって、暑いのは脩一も同じである。だが暑いのと目と鼻が痒いのを我慢の天秤に掛けた場合、暑いの方が軽いのだ。

窓を開けないと新鮮な空気が入ってこないが、花粉入りの空気が入り込んでくるよりは脩一にとっては少しくらい澱んだ空気のまま授業を受ける方がよっぽどマシなのである。休み時間の数分間だけは泣く泣く空気の入れ替えと称して、窓を開けざるを得ないが。

開けた瞬間にくしゃみ連発は四月からの恒例である。

脩一と毎日のコントを繰り広げているキングザおバカの称号を欲しいままにしているのが孝樹 さきもたかき 前雲孝樹だ。空気を一切読まないので能天気キャラとして確立されているが、クラスのムードメーカー的な役割を果たしているのも孝樹だ。

「それって褒めてるの？ 貶しているのかどっちなんだ…？」

「おお！ 意外や意外！！ いつもはこれ以上のこと言っているのに全く反応ないくせしてこういう時だけ反応するお前の野生的な勘が素晴らしいよ！！ 今から山へ行つてタケノコ取りに行つてくるがいいよ！」

パチパチと称賛の拍手を送っているのが、ほとんど貶しているようなものだ。それを知つてか知らずか、孝樹は真に受けたようで、「タケノコ取りに裏山行つてくる！」と言つて、教室を出て行くとした。

孝樹は本気でおバカだ。

「前雲、お前何処へ行こうとしている。もうすぐホームルーム始めるんだが」

「せんせー……」

首根っこを掴まれて、たらりと冷や汗を流している孝樹を見るのは楽しい。冗談で言っているのにそれを実行しようとする孝樹は純粹なのだろうが、純粹にもほどがあるほどの純粹さだ。

「今日は色々忙しいんだ。お前にいちいち構っている場合じゃないんだ」

「せんせー酷くね？ 俺も一生徒の一人なんだけど」

「そうだったのか！ 生徒じゃない気がして俺は自然に扱っていたぞ！ー」

がははと陽気に笑う担任に脩一はがっくりと肩を下ろすと、自分の席に着く。

「おはようだ！ 今日から新しい仲間が加わることになったぞ！！ し・か・も美人ときた！！ おーい、皆に紹介するから入ってこいっ！」

朝練でぐったりしている時に担任の声は聞きたくないが、気分を変えたい時に担任の声を聞くのは良い気分転換になる。

「高良入ってこーい」

半ば投げやりに言いつつ、担任は廊下にいるであろう転校生を呼

んだ。ガラリと引き戸を開けてから真新しい制服に身を包んだ女生徒が教卓へ向けてまっすぐ歩いてくる。担任の横に立った女生徒は腰ほどまである長い黒髪を靡かせ、教室を見渡した。

チヨーク片手に担任は転校生の名前と振り仮名を黒板に書き、テンプレ通りの紹介を始めた。

「転校生を紹介する、高良或乃だ。高良、簡単な挨拶を頼む」

「高良或乃と申す。私と仲良くしていただけるとありがたいな」

ふと顔を上げれば、さらりと腰くらいまで伸びた黒髪で少しきつめの瞳を持った少女が腕を組んで立っていた。

高飛車な声色に生徒は歓喜の声を上げる。

こんなド田舎に転校生、ましてや美少女とくれば誰だって喜ぶだろう。それがどこまで続くかが問題だが。

脩一はこの女生徒に見覚えがあった。

ガタリと立ち上がると、女生徒を指差して、叫んだ。

「お前、昨日のっ！！ 何で此処にいるんだよっ！」

「なんだ、畑田、知り合いだったのか？ そうだ、高良の席は畑田の隣にしよう。高良も知り合いが隣の席なら不安になることも少ないだろうし。高良、畑田に何でも聞いてやってくれよな」

「先生、何で俺が！！」

「よろしく頼むぞ、この下僕が」

「高良ーいくら美人だと言っても下僕とか使っちゃいけませんっ！でも可愛いから許す。俺を踏んでくれえええええ！！」

残念な性癖をクラスメイトに明かしてしまった事実を健が気付くのはもうちょっと後のこと。ひんやりと静まり返り、健の上下左右の席に座るクラスメイト達は僅かではあるが、席を離す。ガタガタと立てる音によろやく自分の犯してしまった失態に気付き、健は顔

を真っ赤にさせて机に頭をぶつけた。

「貴様には十二分こき使ってやるから覚悟しておけ」

「ちよつと待って。お前、足あつたのか？」

「……………貴様の目はどうかしているのか。私がくり抜いて洗ってやるのか？ 少しはマシになるかもしれぬぞ」

「結構です！！ って何で手術道具持つてるの！ 危険危険！ 銃刀法違反！！」

「はいはい、話す時間はたっぷりあるから休み時間とか放課後使って話してね」

パンパンと手を叩き、どうにか教室の雰囲気に戻し、担任は途中だったホームルームを再開させた。

「おい、ついて来い」

「私に命令するとは頭が高いわ。お願いしますからついてきてくださいと言えない至極残念な口しか持っていないのか」

「……今はどうでもいいだろうが、話したいことがあるから場所を変えたいと言っているんだ」

脩一は或乃の腕を掴むと強引に教室から連れ出す。ぐちぐちと文句を言うのに対しては一切の無視を決め込んだ。屋上へ着くまでの間、ほぼ全校生徒に見られていたような気がしたが、気にしないことにした。いちいち気にしていたら、脩一自身の身が持たない思っただからだ。

「屋上の鍵なぞ、何で貴様が持っているんだ。普通の生徒が持っているとは考えにくいのだが」

「鍵なんて持ってない。南京錠は針金でちょちよつと動かせば簡単に開く仕組みになっているんだよ」

脩一自身にも開け方は分からない。何となく鍵穴に針金を突っ込んで動かしていたら勝手に鍵が開いてしまっただけ。二度目は出来ないと思っていたが適当に動かしていたら開いた。深く考えずに鍵を開ければどうにかなる。むしろ、結果論重視。結果までの過程は関係ないというのが脩一の持論だった。

適当に針金を動かせば、南京錠が開く。屋上の鍵の本体は職員室から拝借した時に合い鍵を作っておいた。つまり、屋上の鍵を持っていると証明するためのダミーに近い。

屋上でも日陰になっている場所を選んで、脩一は腰を下ろすと或乃に座るよう促した。或乃は膝を抱えて座る。

「屋上なら誰にも話を聞かれる心配はないな。じっくり俺の質問に答えてもらっからな」

「我から話すことはただ一つ。我の下僕となり、我の友達が望んだ願いを叶えるのだ」

「願いだと。願いを叶えるのはいいとして、何で下僕になる必要があるのか俺には理解出来ないんだが」

「下僕になった方が我にとっては都合がいいのだ。他の者達との兼ね合いもあるのだ。それくらい察しろ」

「でもお前の友達ってどんな奴らだよ……魑魅魍魎の類じゃないだろうな……」

「それ以外に何があるというのだ。魑魅魍魎ではなく日本古来有数の八百万の神々だぞ。神と魍魎の類と一緒にしないでほしいわ。神といえど、崇られても知らぬぞ」

「神も人も、今の高良は俺と変わらないじゃないか」

ちゃんと足あるし、と脩一が指差せば、当たり前だと或乃は鼻で笑い飛ばした。

「当たり前だ。本来ならば今日転校してくる予定だった女生徒に依り代を頼んで協力してもらっている状態だからな。元々の我は実体を持たない存在だ」

「神様が実体を持っていたら大問題だよ。ということは今の高良はちゃんと存在している人間ということでもいいのか？ お前が乗っ取っついていて本当の高良は大丈夫なのか？」

「質問責めか。まあ、貴様も我の下僕となったのだから知る権利はあるな。我は心優しいから答えてやっても良いぞ。本当の高良は元々病気がちでな。我の所に拝みにきたついでに我と契約したのだ」

「契約う？ お前と契約して彼女は無事なのか」

「だから我を悪霊の類と一緒に扱うな！！ 我は由緒正しき神にあ

るのだぞ！？ 或乃は我が治すと決め、或乃もまた同意した正式な契約にあるぞ。神は契約を叶える義務があるのだからな！ 貴様が悩んでいるその花粉症も我は治すことが出来るのだぞ？！」

本当に悪霊だったら拝みたくないし、下僕になるのも遠慮したいくらいだ。というのも、或乃と出会った場所が家の物置であり、或乃自身は神だと自称していたとしても確証が持てないし、第一神と自ら名乗っている時点で怪しさは限界点を突破している。

「花粉症は確かに治してほしいかも。でもなー花粉症は良い治療法とか見付かってるし。神様に頼んでまで叶えたい願いはもつと豪勢なものじゃないともつたいたい気がするんだよなあ」

滝のように流れてくる鼻を吸りつつ脩一は言った。或乃本人が神である証拠はないし、半信半疑だった。

或乃という、通常では決して有り得ない存在に遭遇してしまったが、悪夢だったと脩一の中で決めつけている。もしかしたら、今或乃から要求されている「下僕」もまた夢の続きだと脩一は思っていた。

「意外にも欲を持っていたのか。寡欲だとばかり思っていたぞ。まあ、今から行く場所は花粉症の貴様には非常に酷な場所であるには間違いないのだからついでに花粉症は治しておこう。思考能力を欠いて行くと致命傷になりかねない」

「そんな危険な所へ行くつもりなのか！？」

素早い突っ込みを入れる脩一に或乃は溜め息を零した。

「花粉症という致命的なものを持っている場合なら危険だ。行く場所は杉花粉がたわわに実っている森の奥だからな」

「喜んで治してください」

脩一が頭を下げたのは無理なかった。

「で、どこへ行くつもりなんだ。俺、これから部活あるんだけど」

「部活は自主トレが基本だと健に聞いたぞ。自主トレの最中に済ませる場所にいるから安心したまえ」

「どうも信用出来ないんですけどー。俺をどこへ連れて行くんだよ」

「旧校舎だ」

「何でまた、そんな辺鄙な所へ行かなきゃいけないんだよ。旧校舎は出ることでは有名なんだぞ!？」

旧校舎へ行きたくない理由がもう一つ脩一にはあった。旧校舎の裏手にはたわわに実った杉花粉の林が鎮座しているのだ。旧校舎へ行く用事はほとんどないが、脩一にとっては絶対に避けていきたい場所なのだ。鼻の粘膜の心配もそうだが、旧校舎は得体の知れない物体が出ることでは有名だ。

夏になれば必ずどこかしらの部活が学校合宿の際に旧校舎で肝試しを行う。肝試しに去年参加したが、次の日原因不明の熱を出す生徒が続出した。もちろん、脩一もその生徒のうちの一人だ。

去年の一件以来、旧校舎は全面立ち入り禁止となり、来年の春に



取り壊しが決まっているのだが、決定した途端に教師が謎の怪我や病気を発症するようになり、生徒にも被害が出始めている。学校側は町でただ一つの神社の神主を呼んでお祓いすることになっていた。その、旧校舎へ或乃は入ろうとしているのだ。或乃に手を引かれて、旧校舎の玄関前にやってくると或乃はスカートのポケットの中から鍵を取り出すとドアの鍵穴に差し込む。ガチャリと音を立てて開いてしまふドアに、脩一は後戻りは出来なくなったと思うのと同じ時にどうやって逃げ出そうか考えていた。

ひんやりとした空気が身体全体を包み込んで、脩一は家へ帰りたくなった。今なら杉林を気にせず全力疾走して家に辿り付ける自信さえもあった。

「わかった。貴様、幽霊が怖いのだろう。我を見て全く驚かなかったのに情けない。幽霊でも悪霊とただの浮遊霊と分かれるが旧校舎にいる幽霊の割合は浮遊霊の方が圧倒的に多いから安心しろ。いざとなったら我が貴様を守ってやるからな。そうだ！ 念のために貴様にこれを渡しておこうではないか！」

そう言つて或乃はスカートのポケットの中から水晶のブレスレットを取り出した。

その或乃の言う、浮遊霊が一般的に人間に悪さをしているんじゃないのかという愚痴を飲み込んで、脩一は或乃からブレスレットを受け取る。どこかで見た既視感に脩一は記憶の引き出しを掻き漁った。そして見付けた。

「ん？ これ物置で見たことあるんだけど。もしかして祖父ちゃんの形見かなんかじゃないのか？」

「ああ、貴様の祖父には世話になったからな。これも我が与えたものだ。高価なものであるから大事に扱え」

「ひいいい！ そこら辺に転がってる中学生にそんな高価な物を渡すんじゃないよ！」

ブレスレットを持っている手が震えてしまう。震える片方の手を同じく震え続ける片方の手で抑え込み、脩一は頭ごなしに怒鳴り付けた。

「貴様の身の安全を担保する大事な物ぞ！ これは貴様の魂と思って扱え！ とでも言えば貴様は大事に扱うのか？！ 粗末にするというならば我にも考えがあるぞ」

或乃から受け取ったブレスレットを手のひらに置いたままだったが、或乃はブレスレットを引ったくり襟元を引き寄せると手のひらをちようと心臓の真上に置き何やら呟き始めた。

途端、胸が段々と熱を帯びていき、圧縮された光玉が脩一の身体から飛び出した。或乃がぎゅっと光玉を握り締めれば、心臓がしめつけられたように苦しくなり、脩一はその場に座り込み、悶え苦しんだ。

「ぐあつ！ 高良、お前何をした？！」

ぜいぜいと粗く呼吸を乱す脩一に対して、或乃は平然としたまま見下ろした。

「苦しいか。これは貴様の魂のようなものだ。本来具現化していないものだからな、貴様にも見えるように桃色に染めてやったのだが、気に食わなかったか？」

「魂を握って何がしたいんだ。潰したら俺はどうなるんだ。死ぬのか？」

簡単に潰してしまいそうなくらいに脆弱な光りを発しているそれに脩一は不安を覚えた。

「呆気なく三途の川を渡り、閻魔大王の下へと差し出されるだろうな。そうなっては我の頼みも出来なくなるし、こうして我が貴様の儚い魂を握っていれば貴様の魂は保障されたも同然。悪霊だろうが、他の神だろうが貴様の魂は渡されないから安心して我の手伝いに励むのだ」

にぎにぎと脩一の魂を弄んでいる或乃に、脩一は怪訝そうに眉をしかめた。弄ぶ或乃によく脩一は或乃が握っているのは自分の魂である自覚が芽生え始めた。段々と呼吸がままなくなり、ぎゅっと胸の服を握りしめて痛みを堪えた。

「いや安心出来ないって！！ 他人に自分の命を預ける！？ 俺とお前はまだ出会ってから数時間も経っていないじゃないか。そんな奴に自分の魂、ましてや人質を取られるなんて真似出来る奴の方がおかしいって」

「確かにそうだな。自分の魂を他人に預けるなんて我もしたくないし、預かっておきたくないわ。まあ、簡単に魂は抜けるものだと言様が理解すればいいのだ。そうだな、貴様の魂の半分は我が預かる。貴様の魂は他の人間に比べると強固なものだからな。半分になったとしても支障なく暮らせるだろうし」

握っている魂を分割すると或乃は半分を俺の身体に戻した。半分だけだが戻った安心感は計り知れない。だけど欠けているような感覚は残ったままだ。

「欠けた状態だと憑きやすくなってしまうからな。もう半分は私の魂をやるう。光栄に思え、神魂の半分を人間の貴様にやるのだから」

或乃は自分の心臓の上に手を置き、顔をしかめながら魂を半分取り出す。

「ん…は、ああ……」

苦しそくに身体を弓なりに反らせながら魂を取り出す。顔は薄桃色に紅潮し、瞳を潤ませた姿はどことなく妖艶な色気を感じさせた。脩一は居心地悪そうに或乃から目線を自然体を装って反らしたが或乃に気付かれてしまう。

「っ！ 貴様、そんな嫌らしい視線を我に向けるでないわ！！ この変態がっ！ 公然猥褻！」

「なっ、ばっ。ちげえし！ 高良が変な声を上げるのが……」

「ケダモノ！！ それ以上我を変態な視線で見たら貴様の魂なんぞ、閻魔大王送りにしてやるわ！ それか魔界に転送してサタンの奴隷にしてやるっ！」

もはや、日本限定だけの神だけではなくてきてしまっているが、そこまで或乃の頭が回っていない証拠なのか。はたまた或乃のネットワークが八百万の神だけではなく天界や魔界にも影響を及ぼしているのか。影響があるなら脩一が取る行動はただ一つしかない。

「閻魔大王送りと魔界での奴隷だけは勘弁してください。俺は全う

に極楽浄土の世界に行つて輪廻転生してまた人間になりたいから」

プライドも今は後回し。自分の身が可愛い脩一は振り返らずに或乃に土下座した。がっつと或乃の踵が後頭部に入り、脩一は後頭部を押さえて悶え痛みを凌ぐ。

「貴様はまだ理解しておらぬな。貴様の魂は我が半分握っているのと同じぞ。我は神であり、死なぬ。足らない貴様の脆弱な脳みそでも理解出来る簡単な式ぞ」

「つまり……」

或乃が言うのが真実というならば。脩一の脳内でとある式が浮かび上がるが否定したかった。

「貴様が考えてるので合っている。貴様は我と同じく神に似た存在になったのだ！ 我は高貴な神の一員であるが、貴様は我の下僕。ちよーつと身体と魂が人間離れしただけで普通の人間と変わりはせぬ」

「ちよーつとだけじゃないだろうが！ 神の下僕になるなんてまっぴらごめん被りたいわ！ 戻せ」

「出来ぬ」

「は？ 馬鹿を言うのは大概にしろ。戻せ」

ひくりと頬が吊り上がる。

「だから出来ぬと言つてではないか！ 一度魂同士を繋げてしまえば元には戻らぬのだ！ 戻せたとしても貴様は死ぬぞ！ それこそ、閻魔大王に扱き使われるようになるわ！ 貴様の脳みそはそこまで回らぬ愚かな神経しか持つておらぬのか？！」

「ん？ 俺が死ぬつてことは或乃も当然死ぬつてことで間違いない

のか？」

「我は神ぞ。魂の半分が欠けたくらいで死んでたまるか」

胸を張る或乃。張るほどの胸がないため、薄っぺらい胸板を晒すだけだ。

「そうだよな……俺は人間で或乃は神様。神様が死んでしまったら人間に幸福を与えてやれないもんな。俺みたいな何処にでも転がっていそうな魂、神様にとってはどうでもいい存在でしかないし。諦めるしかないか、死んだら死んだらだし？俺、こう見えても悪運強いし、旧校舎の中に入ってもちゃんと生き延びて帰ってきてやるんだからな！いつか生まれてくるであろう息子や孫や曾孫や玄孫に言い聞かせるんだ！」

「どれだけ子だくさんで長生きしようとしているのだ。貴様の武勇伝を強制的に聞かされる孫や曾孫や玄孫の身にもなってみろや」

或乃ははあ、と溜息を吐いた。未来への野望を強かに持ち、希望を抱いている脩一に或乃は嫉妬心を持っていた。或乃が憑いている『本来の或乃』の寿命がそう長くないのが原因の一つだが。

或乃の願いが叶えてしまったら、或乃はこの身体を離れなくてはいけない。神の魂は人間の身体には負担が掛かりすぎて、元々病弱な『本来の或乃』の身体では長くは持たないのだ。脩一と交わした契約が身体への負担を軽減させるために結んだ手段だ。

1 - 8 : 本当に旧校舎に入るんですか?!

「いいじゃないか。旧校舎に入るのにはそれだけの勇氣が必要だつてことだよ」

「ほう、遅しいじゃないか！ ナヨナヨしてるから心配しておったのだ！」

「ナヨナヨ…今は花粉の季節だから思考もあまり働いてくれないんだよ。神様のお前には完全に無関係だろうがな」

或乃が持っている脩一のイメージは酷いものだ。ナヨナヨしているのは季節限定だと脩一は思っているので、この季節において全ての原因を花粉一択にしている。脩一は原因である旧校舎の後ろに鎮座している杉林を睨んだ。

この憎たらしい杉め、滅びろ！ とバチ当たりなことを呟いてみるとトントンと後ろから肩を叩かれる。旧校舎という場所がいけなかったせいなのか、脩一は思い切り叫んだ。

「ぎゃあああああああああ！！」

わんわんと辺りに脩一の絶叫が響き渡るが、脩一はそんなことを考えている暇がなかった。それほどまでに驚いたのだ。

「うるさいのお。忙しない声を出して一体どうしたというのだ。奇声を上げるほど、貴様はチキンなのか」

隣にいた或乃の耳は脩一の絶叫を諸に受け止めてしまったせいで、耳の機能が一時的に低下し、波打って聞こえていた。男なのに絶叫する馬鹿がいるかと脩一を罵りつつ、脩一の脛目掛けて蹴りを放っていた。脛の痛みを堪えて後ろを振り返ると、絶叫したことを後悔

した。

「そつだぞ、脩一！ 旧校舎へ入るって何で俺に言ってくれなかったんだよ！ こんな楽しそうなイベントを俺抜きで行おうとするなんて水臭いなあ」

「な、何だ…… 孝樹と健だったのか。い、いきなり肩叩くんじゃねえよ。驚くだろうが」

「脩一がこんなにも慌てるなんて久しぶりに見たわ。いやー良い物を見させてもらったわ！」

ありがとうありがとうと言いつつ、孝樹は脩一の肩を叩く。ボケっとしている脩一の顔を見て、孝樹は首から下げていた携帯で脩一の間抜け面を写真に収めていた。

ピロローンと携帯らしく間抜けな音で写真を撮られ続け、撮った画像を見ては二人は爆笑していた。或乃が「後で私にも送ってくれ！」と頼んでいる時に脩一はようやく我に帰った。

「なあにしてんじゃ、すつとこどっこーい！」

「で。孝樹、何故竹刀を持っているのだ？」

怒る脩一を一切無視して、或乃は孝樹に訊いた。制服と鞆を持っている或乃と脩一の姿とは違い、孝樹と健は部活の最中であるのが見受けられたからだ。

孝樹は胴着と袴を着ており、左手に竹刀を持っていた。足元は草履や雪駄ではなく、運動靴に素足。健もまたジャージと短パン、ラニンング用のシューズを履いていた。

「インターバル中にさ、脩一と高良さんの姿を見かけて、寄り道してきたんだよ。健とは一緒に走ってたまたまた会って一緒に練習してたんだよ。なー」



「ああ」

そこで脩一は一つの疑念を抱いた。健とはクラスメイトでもあるが部活が一緒なのだ。健の専門種目は長距離。孝樹は陸上競技会での種目は百メートルと言った短距離を選択していたはずだ。加えて健は県代表にも選ばれるほどの実力を持っている。自主練ではあるがタイムを計っているだろうインターバルで健が手を抜くはずがないのだ。

「健のスピードと孝樹のスピードでは明らかにおかしいと思うんだが。今日の練習メニューはインターバルはなかったはずだろ」

「……………立ち入り禁止の校舎に入ろうとしている転校生とクラスメイトの姿を確認しちゃったら、何か悪いことでもしようとしているのかなーと学級委員長は考えちゃうのが本音よね？」

「委員長?!」

くるりと振り返れば、学級委員長の楠木亜良来くすきのあきが立っていた。楠木の隣にいるのは隣のクラスで楠木の幼なじみである柊野木咲紀はらのき。二人とも脩一と健と同じ、陸上部に所属しており、こちらも自主練があるのにも関わらずいた。

「そうそう、楽しそうだなーと思ったら見過ごすわけじゃないですよ！」

「お前ら自主練はどうしたんだよ……………」

「自主練なんてとっくの昔に終わらせたに決まってるでしょ！もうすぐ暗くなるし、陸上部に当てられているグラウンドには照明がないし。暗くなったらスターターの練習かインターバルになるでしょ。ほとんど部員がインターバル走ってるよ」

サッカー、野球、ソフトボール、テニスとグラウンドのほとんど

を占領され、陸上部の練習する場所は近くの高校の第二グラウンドを利用させてもらうか、基礎体力作りで放課後の練習を終えてしまいう場合が多く、個人トレーニングは休日の練習に回されることが多かった。投てき種目や高跳び、幅跳びと言った種目は準備に時間が掛かるという理由から平日は基本的に基礎体力作りだ。脩一の専門種目は短距離なので、スターターの練習と基礎体力作りで平日の練習を終える。無論、今日の練習メニューも基礎体力作りでインターバルを走り込む予定だった。

旧校舎に入り込む夕日の明かりで時間を忘れていたが、時計はもうすぐ十八時を差そうとしている。早く旧校舎の中に入らないと街灯がほとんどない中、自転車を漕いで家に帰らなくてはいけない。

「もうこんな時間なのか。出るには相応しい時間ではないか」

「俺はさっさと帰りたいけどね」

「畑田君って意外にも怖いのが苦手なの？　そういや去年の肝試し参加してなかったよね。怖かったから係に回ったの？」

空笑いしか返せなかった。

一見が弱く見える畑野木は、大のホラーやオカルト系が大好きで由緒ある寺社仏閣へ行つては話を聞くほどのマニアだ。旧校舎へ入るってことになれば、真つ先に彼女はやってくるだろう。そして今、彼女は得体の知れないお札や数珠を手にかけていた。

「怖いなんて男として恥ずかしくないの？　とんだチキン野郎ね」  
「……………」

ふんつと鼻で笑い飛ばす楠木に俺は何も言えなかった。オカルト系を一切信じてはいないが、テレビや他人の写真の中に映っているなら他人事だと思って何の疑いもなく見る。しかし自分が関わるとなれば話は別だ。

「俺が怖いといつ言ったんだよ。去年はたまたま係をやる奴が不足していたから俺がやっただけで、旧校舎に入るつもりではいたぞ。たまたま先生に捕まったただけだ」

「とか言っちゃってー。本当は怖かったんでしょー？」

語尾を伸ばして、畑野木は肘で俺の腹を小突いてくる。地味に痛い。

絶対に入りたくなかったことがバレてしまえば、明日からの

いや今日からのあだ名はチキンになる。絶対にバレてはいけない。ニヤニヤと嘲笑する或乃が何かを言わんとしているのを俺は横目で捉えて、ぞっとした。或乃が何かしら変なことを口走るのは予想出来た。

「ああ、コイツはド級のチキンだからな。怖がって入ろうとしなかったから、この私が説得しようとしていたところなのだよ。何か脩一が入ってくれる言葉を掛けてくれたらありがたいんだけどね」

ニヤリと口角を上げた或乃は『この私が』を強調して言うと、四人に頼んだ。

それと、チキンを強調するな。

「誰が怖がったと言ったんだよ。科学的に証明されていない物体と関わりたくないと言ってるんじゃないか。高良が閻魔大王の下僕にしてもらうだとか地獄へ落とすとか言ってるんだよ」

「脩一……何処か悪い所に頭を打ち付けたんだろう？ 地獄だとか閻魔大王だとかそんな非現実的な妄想に付き合ってる暇はないんだ。さっさと旧校舎入ろうぜ」

「健、言ってることが矛盾してるよー？ 旧校舎は非現実的なことがいっぱい待っているというのにさ。否定しちゃったら……本当に出てきちゃうかもよ？」

口端を上げて、栃野木は脅し気味に言ってくる。ぞっと背筋に何かが走った。

これから旧校舎へ入ろうとしているのに追い打ちを掛ける忠告に、或乃以外の四人は顔色を悪くした。

「なあんてね！ 本当に出てきたらビックリだけでもねー。私もホンモノはまだ見たことないから何とも言えないけど、本当に閻魔大

王さまが出てきたらサイン欲しい！ 助手の小野篁にも会ってみた  
い！」

「栃野木、篁はただのヘタレだぞ。下手な妄想を抱くと幻滅するわ」

（おいおい、お前は篁に会ったことがあるのかよ）というツツコミ  
はしないでおう。

或乃を本気にさせたら、俺が小野篁や閻魔大王と会ってしまうかも  
しれない。それこそ失神する。魂抜かれてこき使われる。

「もー！ 栃野木じゃなくて、咲紀って呼んで？ 私も或乃ちゃん  
って呼ぶから！」

「あつあつ或乃ちゃんだと！？ 尊い私の名前を敬称じゃなくて友  
達感覚で呼ぶのか！？」

顔を真っ赤にさせて抗議する姿が可愛いと思えてきた俺は、嘘だ  
と頭を振った。

自分から尊いと言う人もいるのか。というか或乃は何の神様なん  
だ。本当は名前もない魑魅魍魎の類じゃないのか。

「いいじゃない！ せっかく友達になれたんだからさ！ で、さ！  
或乃ちゃんは旧校舎へ何しに行こうとしたの？」

「……友達の願いを叶えるために行こうとしているのだ。だがチキ  
ンの脩一が行くのを渋ってな……説得していたところだ。さっ、さ  
っ咲紀からも頼んでくれぬか？」

「学年でただ一人旧校舎に入っていないんだよ！？ いつ取り壊され  
ておかしくないのに！ こんな特別な機会めったにないんだから進  
んで旧校舎に入るべきだよ！！」

鼻息荒く語る咲紀に俺は一步後ずさった。咲紀の勢いもそうだが、  
熱心に語れるほどの魅力が旧校舎にあるとは到底思えなかったのだ。

ましてや、霊といった超常現象の類は脩一は一切否定する立場を取っているため、魅力どころか真っ先に家に帰りたかった。

この場の状況が悪夢だ。俺は自分の頬を抓る。鈍い痛みだけがじんわりと広がるだけだった。

「頬を抓ってどうしたのだ。これは悪夢でも何でもなく、現実なのだ！ちゃんと現実を受け止めよ！まだ旧校舎にも入っていないし、まだ視てもいないではないか！」

俺の腕を引っ掴んだ或乃は旧校舎へと一步を踏み出した。

「おお！さすがに薄気味悪いな……」

電気の通っていない旧校舎の中を一行になって歩く。

先頭を歩くのは或乃。その次は俺。尻込みながら脩一は或乃の長い黒髪を一点集中して見ていた。左右に揺れる髪の間を見ているだけで安堵する。

帰りたい気持ちは変わらないものの、冷静に或乃の後を追っていた。というのも俺が逃げないように或乃は腕を掴んだままであり、逃げたくても逃げられない状況だった。

嬉々とした声を上げたのは健だ。怖い物知らずと言ったように彼はきよるきよると周囲を伺い、何か変わった物はないか確認しながら前を歩いていった。

「さ、さすがに怖いわね……」

「全く、これくらいで怖がっていてどうするのだ。これから会う奴は怖気付いているのを気付いたら即行自分の命が危険になると思え」

「そんな危険な人に会いに行くのかよ！ 命の保証が出来ないってどれだけ恐ろしい人なんだ……」

顔色を青白くし、握る竹刀の力が更に籠もる。

或乃の脅しに一番恐怖しているのは、実は俺自身だ。或乃に気付かれないように必死に隠しているのだが、或乃にはバレバレだった。

「安心しろ、命の保証が出来ないのは脩一だけだ。他の者は私が守るが」

「何で俺だけ危険にならなきゃいけないんだよ！」

「私は皆の命を守るだけで精一杯だが、脩一は先程渡したブレスレットが作用して、私が守らなくてもよくなっているのだ。何、貴様も女である私に守ってもらいたいのか？ とんだ腰抜けだな」

ふんと嘲笑してくる或乃に脩一はヒクリと頬を動かした。  
恐怖もあつたが或乃に守られたくないというのは本音だ。出来る  
なら自分の命くらい自分で守りたい。

「彼女を待たせているからさっさと行くぞ。機嫌を損ねては面倒だ。  
私にも火の粉が飛んできかねない」

約束した時間は何時なのだろうか、そもそも人でないモノに時間  
指定なんてあるのかと疑問に思ったが聞かないでおこうと俺は決め  
た。

出来ることなら旧校舎に長居したくない。或乃以外、誰もいなか  
ったら今すぐにでも旧校舎を後にしている。

夕暮れ時の十七時すぎ。夜と昼が交錯する最も危険な時間帯なの  
だと聞いていたから。

昼は陽の気が溢れ、人が活動する時間帯。  
夜は陰の気が溢れ、魑魅魍魎といった人ならざるモノが跋扈する  
時間帯。

夕暮れ時はそんな人と魑魅魍魎が交錯し、魑魅魍魎と遭遇してし  
まえば神隠しに遭い、二度と人の生活する昼の時間帯に戻れないと  
されているのだ。

もう一つ、脩一には気がかりなことがあった。

昼夜の気温変動が激しい月は、山に入ってはいけないという言い  
伝え。

山の神が田の神、農作物の神へと変化する月に山へ一歩踏み入れ  
れば、現世に帰ってこれないという。季節の変わり目に遭難者が多  
い理由の一つがこれだ。

俺も魑魅魍魎と言った類は信じないが、この言い伝えだけは信じ  
ていた。

神隠しに遭う前、必ずと言っていいほどに遭難者は一人の少女と  
会ったと言う。



その少女は願いを叶えてほしいと言うのだが、拒否すれば二度と現世に戻れなくなってしまうのだ。

まさかの空想が頭を過る。その少女が或乃という可能性だっただけだ。実際に或乃は俺に願いを叶えてほしいと言ってきたのだ。

偶然と言っているのか、悪運が強いと言った方がいいのか。俺には悪運だとは思えない。

「着いたぞ、彼女はこの教室にいるのだ」

着いた先は音楽室だった。鳴っているはずのないピアノが鳴り響いている。

弾いている曲はベートーヴェンのピアノソナタ十四番月光第一楽章。

調律されているはずなのに、狂いのない美しい旋律に耳を傾けてしまいたいそうになり、頭を振った。

旧校舎は立ち入り禁止の措置が取られている。何人たりとも旧校舎に入れない。ましてや人間が入ったとしても音楽室へ行ってもわざわざピアノを弾こうとも思わない。

「上手だね……」と言ってもこんな田舎じゃここまで弾ける人なんて限られてくるんじゃないのかな」

ピアノ教室はあるが、ここまで上手な人がいれば小さな町のネットワークですぐに広まるはずだ。

俺が持っている人伝えのネットワークではピアノ上手い人はいなかった。つまり、弾いているのは人間じゃない。

頭で考えなくても分かっているはずなのに論理的に答えを導き出さなくなる。現実逃避をしていたのも山々だが、彼女の願いを叶えないと俺が神隠しに遭ってしまう可能性もあった。

各人が恐怖している時、或乃はガラリと音楽室の引き戸を開け、

中に入る。

ありきたりな二重窓と防音対策の施された壁、上下に動く黒板。中央にはグランドピアノが置かれており、その前には制服を着た女生徒が座って、鍵盤に指を踊らせていた。

「芙海ちゃん」

或乃が女生徒に声を掛ければ、芙海と呼ばれた女生徒が振り返る。顔色は青白く、三つ編みに結われた黒髪に眼鏡を掛けていた。

「あら、或乃ちゃん。いらっしやい」

驚いたことが一つあった。芙海には足があるのだ。幽霊の類なら足首から先は透けて見えるはずなのに。或乃といい、芙海といい幽霊の概念を壊しに来ているとしか思えない。

「ななな、何で?!」

大きい瞳を更に大きく極限にまで見開き、柝野木は指を震わせつつ訊いた。指差す先にいるのはもちろん、芙海である。

「どうしたのだ？」

芙海と或乃はこてんと可愛らしく首を傾げる。

「ど、どうして足が……」

「ああ、本来なら芙海は幽霊の一種だから見えないのだがな。ピアノが弾きたいという念から足のあるモノへと昇格したのだ」

「つまり？」

「幽霊から妖怪へとランクが上がったということか？」

健が一つの仮説を口にする。

「まあ、そういうことかしらね。幽霊だと不便なのよ。物質に干渉出来ないからピアノ弾けないし、人に乗り移って弾けたとしても指が追い付かなくてすぐに腱鞘炎を起こしてしまうし。拳句、除霊されそうになってしまうし……不便だから願ったの。願ってこうしてピアノを弾いているのだけでも、地獄や中層界の人達はクラシックに興味がなくて。教会を媒体にしている天界と違って音楽を奏でることを知らないのよ。だからあなた達が持っている力を貸してほしいの。特に烟田脩一君。あなたの力は重要なの」

「俺の力が？」

「こんな平凡を代表するような奴が芙海さんみたいな妖怪の力になるの？」

さすがに言いすぎだ。普通に過ごしていれば誰だって平凡人生まっしぐら。

或乃と出会わなかったらファンタジーの世界に飛び込まなかった。RPG世界だったら間違いなく俺は主人公一味を横目で見ている名前もないようなモブだ。

「それがまたなるのだよ。脩一の家がどんなのか知っているかい？ 脩一の家は私みたいな神や芙海みたいなこの世に未練のあるモノ達の相談を受けて、天界なり地獄なり中層界なり送っている家なのだ。証拠に脩一の家には祠があるだろう。あの祠が現世と別界との入り口なのだ。旧校舎もまた別界への入り口となっているから魍魅魍魎の類が視えたりするのだよ」

「確かに祠はあるけども。両親は普通の一般人だぞ。家の守り神のようなモノだと思っていたのに……」

まさか家の敷地内に置かれている祠が重要な役割を果たしていたなんて知らなかった。

そんな重要なモノが敷地内にあってたまるか。知っていたとしても絶対に近付かない。

「或乃ちゃん、旧校舎から別界へ行ける入り口って何処にあるの？」  
「別界なら今いるじゃない。此処が現世の鏡体の反対側。だから旧校舎を壊してはいけないのよ」

「つまり……」

「既に別界に入り込んでしまっているということ。もちろん悪さをしたい妖怪や悪魔だっている。私はまだ下っ端だけでも」

「聞いたことはないか？ 夕方の時間帯に旧校舎または陰気が集まる場所へ近付いてはいけな。付近一帯の住民に布教するよう伝えたのだが如何せん、時間の経過には勝てなかつたようだ」

「伝えたのは或乃つてことなのか……」

「脩一はどうやら知っているようだ。私が説明するよりも現代に布教をしなかつた脩一が悪いのだから脩一が説明せよ」

「何で俺が布教しなきゃいけないんだよ！ そもそも布教なんてしたら俺の思想が疑われるだろ？！」

「貴様の思想など関係ないのだ。布教していれば、貴様以外別界へ入り込むことはしなかつたのだ」

「何それ、旧校舎に入る前に言ってくれば私達だつて諦めたかもしれないよ？」

柝野木が言つてほしかつたと肩を落とす。

柝野木の場合、言つたとしても嬉々して入つていったに違いない。

「では知っていたとして、仮定を考えてみようか。旧校舎に入つた時点で別界だと知っていたとしたら。入つた、入らなかつた？」

俺の問いに四人は黙つてしまった。

旧校舎に入るという前認識は好奇心が強く、肝試し感覚の軽い気持ち。

黙つた四人に或乃は大きく溜息を吐く。

「私は言つたじゃないか。脩一は自分で守れるが、私が守らなくてはならない。咲紀ちゃん達が私の傍から離れた時点で咲紀ちゃん達は現世に戻れないと思つてほしい」

じつと或乃の大きな瞳がじつと真剣な眼差しをぶつけてくる。

「ちょ、ちょっと待てよ。去年、この校舎を使って肝試しをした時は或乃ちゃんはいなかったが、一人も欠けずに戻ってこれた。矛盾していないか？」

「ああ、簡単だよ。肝試し用に誰かが戻って来れるように準備したのだろう。準備したとしても必ず綻びが出てきてしまう。何故か。答えは実に簡単なものだよ。この付近一帯の役目は脩一の家の人だからな。脩一の家族の誰かが準備しないと完全なモノとは言えない。五十年に一度、その綻びを直すために」

「ってことは何だ。その綻びとやらを直したいから協力しろってことか？ 本格的にRPGの世界に突入してしまったわけだ」

既に思考能力の容量は限界を超えてしまっていた。

「ところで全部で何か所くらいあるんだ？」

「別界と現世の封印は全部で五か所ある。火急的に修繕が必要な個所は二か所ほどだ。その二か所にいる奴らが厄介での。脩一一人では攻略が難しいのだよ。」

そこで、規定があるのだが、別界の秘密を知ってしまった者は強制的に修繕作業に協力しなければならないのだ」

「は？」

「それってつまり……」

「俺らはパーティ組んで奴らと闘えってこと？」

「奴らってどんな人なんですか？！」

目を輝かせて或乃に詰め寄るのは柝野木だ。怖い物知らずの彼女にドン引く。

「妖とか幽霊とか悪霊とかの類と思ってくれば良い。奴らを軸として封印をしているからな。奴らをボカッと殴……違った。気絶させるという至極簡単な作業だ」

殴るとか物騒な言葉が出てきたが気のせいかな。気のせいじゃないな。

「でも奴らって実体がないんだろ。どうやって対抗するというんだ」「安心したまえ。道具は脩一の家に揃っている。ということ、来週末早速修繕しに向かうぞ」

拳を高らかに掲げて或乃は意気揚々と宣言した。  
気分はガタ落ちだ。

田舎故の特性は、山の陰に隠れて平野部よりも日の入りが早いことだ。

俺が住んでいる山間部にほど近い集落も同じで、日の入りが早い時期であっても十八時にもなればすっかり日が落ちて暗くなってしまう。

日が完全に落ち、グラウンドを照らす照明が付けられ始めた頃、俺は体育館下の駐輪場にいた。グラウンドでは大会が近いのかソフトテニス部が熱心に練習している。

俺は日が落ち、自主練習のメニューも終わってしまったえば部活も終わりという比較的楽な部に所属している。

なんとか校内案内を終えた俺は少ない練習時間ながらも、顧問から与えられたメニューと、プラスチック自分課題したメニューをこなす。普段よりメニューをこなせなかった分、帰路で補おう。

家は学校がある市街地から山一つ離れたところにある。毎日が登山。通学路がトレーニング。

ロードレーサー用の自転車と中学生が持つには少し高額な自転車だ。

ロードレーサー用の自転車を買うつらいなら、電動アシスタント付き自転車を買いたかった。



十六歳になったら即行バイクの免許を取りに行くと決めている。高校もまた、崖を挟んだ反対側に二校ほどあり、卒業生の大半は二校のうちのどちらかに進学する。俺もそのうちの一人になる予定だ。

自転車の鍵を外し、台から下ろして駐輪場を出る。

校門を抜けると待っているのは下り坂。軽くブレーキを効かせて、次の坂までの小休止。

今日の晩ご飯はなんだろうと思う前に待っているのは今日出された課題の数々。

俺は提出日前日に焦って始めない。課題が出た途端すぐさま取り組む。

週末はのんびり他の授業の予習をしたり、復習する。

五月末には実力テストが控えているので、苦手な所をマスターしておきたかった。

ご飯を食べた後、テレビを見つつ勉強するか。

自転車の回転音と虫の音、遠くでクマ避けに鳴らされる音をBGMにのんびりと自転車を漕いでいた。

「貴様っ！ 待た、ん…かつ…！」

この声が聞こえるまでは。

家までの道のりの中でも最難関である緩やかな三段の坂に差し掛かっていた。

アップダウンの激しい坂であれば、一気に体力を消耗するが下りは漕がなくていいので楽出来る。だが緩やかな坂だと、使う体力は倍だ。下りであっても漕がねば前に進めない。

聞こえた声を気のせいだと思っていたかったが、制止を求める声はまだ続いていた。

街灯の近くに自転車を止める。

普段なら家までノンストップで走り抜けた。普段を貫き通したかったと自転車を止めて後悔した。身体が酷く重い。目蓋も身体も休息を訴えて、気怠さを訴えていた。

「私が止まれ、と言ったらっ！ 止まる、のが、当然であろうっ！」

息絶え絶えに訴えてくる。

「何で止まらなきゃいけないんだ。俺はさっさと家に帰って待つている美味しい晩飯を食べるんだよ」

「だから、私も一緒に帰るから自転車の後ろに乗せていけと言っているのだ」

「……………」

ただ帰る方向が一緒なだけだ。だがこの先の道にあるのは数件の家しかない。

ウチの近所で俺と同じ年くらいはいないし、最近越してきたという噂も聞いたことがなかった。

一体或乃は何処に住んでいるのだろうか。

などと、考えたものの夜が深まるだけだ。帰り路を急いでいるので、これ以上留まるのは精神安定上非常によろしくない。

俺は怠い足を叱咤し、サドルに跨り自転車を漕ぎ始める。

ペダルを踏む足に力を込めた。これから挑む坂に疲れから普段以上の気持ちを持って望まないと挫けてしまいそうだったから。

途中で挫けてしまったとしても、家には帰らないといけない。

携帯電話を持たされていなかったし、持っていたとしてもこちら

辺は電波状況が最悪だ。迎えを呼ぼうにも呼べない。

疲れていたとしても、今は自転車を漕ぎ続けるしかないのだ。

「待てと言っているのだ！ 私を置いていくでない！」

後ろから聞こえてくる或乃の声は一切無視だ。

というか、或乃は此処まで走ってきたのか。此処まで何キロある  
と  
思っているんだ。魑魅魍魎の類だから関係ないか。

下りがなく、登りが三段に渡って続く坂の三段目に差し掛かって  
きた頃、俺は後ろを確認した。或乃はまだ走っている。

スピードを緩めると或乃は追い付いて、自転車と同じ速度で坂を  
上り始める。

「……で、何でお前は俺の後をついてくるんだよ！ 自分の家に帰  
れよ——！」

「家はこの近くにないのだ。この身体の持ち主はこの街から結構離  
れている所に在住しているのでな」

遠回しに言う或乃に俺は一抹の不安が過った。

「もっと簡単に説明するとなんだ」

嫌な予感しかしなかった。

「脩一の家泊めろ」

ニコリと言う或乃に俺は頭痛がしてきた。  
よろりと自転車が傾き、体勢を持ち直す。

「何で同級生の女の子と一緒に暮らさなきゃいけないんだよ！ 意

味が分からない……」

もう少しで下りだ。

「もともと私はあの家に住んでいたのだから私の家でもあるのだ！別に住んでも構わないだろうよ。なあに安心したまえ！ 思春期の初心な少年が関わるあんなことやこんなことに興味関心を持ち、あらぬ方向にぶっ飛んでしまうのは良いことだ。せいぜい今のうちに黒歴史を重ねるのだな！」

「うわぁー！！」

ガシャリと或乃が後ろの荷台に乗ってくる。二人分の体重でぶれる自転車を持ち直す。

後ろに誰かが乗ってくるなんてまずなかったから緊張した。

緩やかな登りが終わり、下りに差し掛かった。

下りになれば家まであと少し。登りもなく、あまり漕がずに家まで辿り着く。

「間抜けな声を上げてなんだ。だらしないな。さつさと家まで漕ぐのだ」

ふわりと或乃の髪の毛から漂う匂いに俺はつい顔を赤らめた。

シャンプーの匂いなのか体臭なのか甘酸っぱい匂いがする。花粉のせいで鼻が詰まっているはずなのに良い匂いだけは通す鼻に、俺は賞賛したくなった。

詰まっていなければ、もっと良い匂いを嗅げたかもしれないのにと少しだけ悔やんだ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5538s/>

---

物体Aの職務

2011年12月27日21時51分発行